

地質と娯楽あれこれ

沼田 誠*

私たちサラリーマンに休暇があれば、多忙な常日頃の仕事を忘れて、ストレス解消の目的で娯楽にひたしんでいます。

娯楽も今や一大産業となっています。この産業にも地質を時折り採り入れ、主目的なストーリーやシーン（場面）をかなり引きたてています。私がこれまで観てきた地質及び地質的な背景を採り入れた2～3の娯楽について感じたことを、雑感として述べてみます。

まず、娯楽産業の1つには映画があります。日本沈没（小松左京原作 東宝映画提供）は今や花形となっているプレート説を採用した映画である。この映画は太平洋プレートが大陸プレート側にもぐりこむことにより、長い期間に歪が生じて、地震が発生し、日本列島が沈没することを同名のフィクションを映画化した作品である。映画の物語としては、地震の前兆が海溝に現われ、次第に地震によって日本列島は沈没し、その後生き残った日本人は沈没により故国を失い、世界各国を果てもなくユダヤ人の如く貨車に乗せられて、流浪することで終る比較的暗い映画であった。地質が主役を演じた作品であると言えよう。しかし、全体的に地質考証も整っていたが、この映画を観た者に強制的にプレート説をおしつけた作品である。プレート説は仮説にすぎない。地質を知らない人にとっては仮説を信じきってしまうでしょう。日本沈没はフィクションであるため、全体の映画の流れを表現するうえでは、強制的に仮説をおしつけて事実のように想定し、実物の学者まで出演して、製作者は映画をもちたてたのでしよう。欲を言えば地震の発生に至るまでの過程は仮説を強制しなくても表現できたでしょう。この映画の封切後、仮説は別としても地震に対する防災の認識が一地震の避難場所の設置、保存食の確保など一身近に高まってきたことは事実のようです。

一方山田洋次監督によりフーテンの寅さん（松竹映画）シリーズのうち歌手の都はるみをゲストスターに迎えたこの作品は、地質は背景に写る程度であるが、このシーンにより物語全体を十分盛りたて、観た後、はればれとした気分さえしてくれる映画であった。この寅さんの映画は新潟県にロケーションを行い、県民会館、出雲崎や佐渡小木町などおなじみの場所が撮影されています。映画の中の海辺でのシーンには黒色な岩盤が写されている。小木周辺の磯辺である。ここに寅さんと都はるみと佐渡民謡グループ（漁師）の三者が佐渡おけさを歌うシーンがあり、黒色の地質が歌の音色とともに三者をうまく引きたてて、都はるみをさらに美しく、映画の中へひきこまれる様にさえ感じます。この磯辺の黒色な岩盤は風蝕を受けており、地質図を照らしあわせてみると小木周辺であることから、玄武岩（basalt）の溶岩であることが解ります。この黒色な玄武岩を背景にして歌った都はるみの歌がその岩相と調和して美しく感動させたのである。学生時代の頃歌った地質屋数え唄の中に“バサルト美人が忘れ得ぬ”の心境と同じであった様にさえ感ずる。バサルトこと玄武岩を薄片にして、薄片にするまでが高度な技術が要求される。そのこともあってか、偏光顕微鏡で玄武岩の薄片を観るとカンラン石、斜長石や沸石など造岩鉱物が偏光してきらびやかに、美しく、バサルト美人と称するように表面を観ると黒いが、薄片を観ると美しく、そして綺麗に観察することができる。山田洋次監督は玄武岩のことを知って意図的に

* ライト工業㈱新潟支店 技術課長

製作したかは知らないが、この流れと歌手と景勝地に合せて製作したのである。寅さんシリーズの作品は日本人の故い心（人情）をとらえるばかりでなく、観るものにとって自由に解釈ができることが、おそらく、20年以上も永くシリーズ化が続く秘訣であると思われる。

今や私にとっては見たこともない年間2兆円とも3兆円とも多額の売り上げを示す娯楽産業であります。これは農林水産省の開催する中央競馬（JRA）があります。JRAはサラブレッドがスピードを出して競うことです。サラブレッドの生産者たちにとって0.1秒でもいかにスピードを短縮するかに一生涯懸命だそうです。この産業の中にもいかに早く走りぬくかによってサラブレッド界に文化が生ずるのでしょうか。その様な中で新潟競馬場のグリーンターフは日本一だそうです。グリーンの中の娯楽は最高です。グリーンにはゴルフやフィリクススポーツと称するこのJRAが代表的でしょう。ゴルフは一度も経験がありませんので、後者のフィリクススポーツについて感じたことを述べてみます。

新潟では、春と夏のシーズンにJRAは開催されます。開催されると重賞レースや特別レースが組み込まれ、それぞれの特別レースに観しむを感じさせるため、このレースにはローカルの観光地や景勝地の宣伝を兼ねて用いられているそうです。特別レースには時おり観光地や景勝地の地質が説明されています。その説明文の中には的中枠がパズル化され、クイズのようにさえなっている気がします。今年の春、佐渡の金北山特別や魚沼郡の清津峡特別がありました。入場口で配布されたパンフレットにはレース名が紹介されています。それらを原文のままを次に写しますと、金北山特別では、「レース名紹介<金北山>両津市と佐渡郡金井町、相川町の境にあり、大佐渡の中央部を占める佐渡島の最高峰、標高1,173m山体は古第三紀の輝石安山岩からなり、険しい峰を形づくっている。地元男子が7歳になると登山してシャクナゲの枝を持ち帰る風習がある。」

この特別には地形、地質や習慣が説明されています。ただ佐渡の地質図を参照するとわかりますが、輝石安山岩は見方によってはそうかもしれませんが、古第三紀ではなく、新第三紀となっております。わざと間違えたかその辺の意向はわかりませんが、誤まった三ではなく、7歳の男子やシャクナゲにちなんで、このレースは2-8で決まりました。

また、清津峡特別をそのまま紹介すると、「レース名紹介<清津峡>清津川が十日町盆地に流入するまで輝石安山岩地帯をうがって形成した峡谷で、中魚沼郡中里村倉俣から、三国街道沿いの八木沢までの間約12Kを言う。上信越高原国立公園に属し、黒部峡、北山峡とともに日本三大峡谷のひとつに数えられている。」

清津峡は輝石安山岩が分布する峡谷を、むしろ正確に言うなら石英安山岩に近い岩質であるが、短い文でよく表わした景勝地であることがわかります。因みにこのレースは土谷騎手に引っかけ同枠の5-6で決まりました。

いずれの特別にも“安心”である安山岩が使われており、その配当はいずれも安心した、いわゆる荒れたレースではなく、硬いレースだった。

娯楽の中にも意外と地質名（すべて輝石安山岩）が脇をかためています。

硬質な安山岩が山地や景勝地を形成するにふさわしい地質からなのでしょう。いずれも紹介文をフィリクス的に解釈すると、その特別レースの決定した枠番は落語で言う“シャレ”であり、さらには落（おち）に匹敵しているような気がします。ここにパズルのようなクイズになって、ヒントが提供されていることはギャンブルでなく、むしろフィリクススポーツと呼ばれる故なのでしょう。JRAが良いとか悪いとかは別としても、ここで笑う所にストレスを解消すべき娯楽の意義を感じる次第です。